

# 体育会学生の大学・競技生活と キャリア意識に関する調査報告

高 峰 修

## I はじめに

本学では毎年、200 名を越す学生をスポーツに特化した入試制度によって迎え入れており、彼らは入学後、それぞれの体育会運動部に所属し、4 年間に渡って競技中心の生活を送ることになる。しかしスポーツ入試によって入学した体育会学生たちが、入学後、どのような大学生活を送り、将来の就職や引退に対してどのように考えているかについてはよく把握されていないのが現状ではないだろうか。このような問題意識に基づき、本稿では体育会学生を対象とする調査を行い、体育会学生たちの大学生活と競技生活の充実度、そして卒業後のキャリアに関する意識や行動に焦点を当てて報告する。

## II 研究方法

### 1. 調査方法

(1)調査時期：2008 年 10 月

(2)調査対象

明治大学体育会のうち、競技特性を考慮し、個人種目の 2 部と集団種目の 3 部、計 5 部に所属する学生（以下、体育会学生）を対象としてアンケート調査を行った。体育会学生を対象に調査を行うことについては、各部の部長あるいは監督から承認を得た。調査対象は計 287 名であり、

そのうち 215 名から回答を得た。全体の回収率は 74.9%であるが、各部の回収率はほぼ同率であった。

### (3) 配布回収

調査票の配布および回収については、ある一つの部に関しては、全部員を一堂に集めて調査員が調査の趣旨を説明したのちに調査票を配布、その場で記入してもらい回収した。他の 4 部に関しては、まず各部の主務に調査協力を依頼し、部員数分の調査用紙を渡した。主務が部員に調査用紙を配布し、回答が終わった調査票は主務が回収して調査員に返送してもらった。

## 2. 調査内容

調査票の内容は多岐にわたるが、本報告に関わるものを取り上げれば以下のようなになる。

- (a) 諸属性：所属学部、学年、性別、過去の最高競技レベル、入学試験タイプ、学部・学科の希望と現状
- (b) 競技の位置づけ：3 項目、各 5 段階尺度
- (c) 体育会のステイタス：3 項目、各 5 段階尺度
- (d) 勉学に対する意識：3 項目、各 5 段階尺度
- (e) 引退後への意識 3 項目、各 5 段階尺度
- (f) 卒業後の労働意欲：3 項目、各 5 段階尺度
- (g) 競技生活と大学生生活の充実度：2 項目、各 5 段階尺度
- (h) セカンドキャリアに関する認識と行動：4 項目、各二者択一

## 3. 分析方法

各項目の回答傾向を確認するために、度数分布とクロス集計を行った。クロス集計では同時に  $\chi^2$  検定を行い、2 変数の関連性について検討した。

### Ⅲ 結果および考察

#### 1. 体育会学生の属性と特性

分析対象となった215名の諸属性と特性を表1に示した。体育会学生が所属する学部としては政治経済学部が最も多く、次に商学部が続く。法学部、商学部、政治経済学部、文学部、経営学部の文系5学部で分析対象の9割近くを占めている。体育会学生の学年では1年生がやや多く、4年生が少ないが、ほぼまんべんなく分布しているといえるだろう。性別に関しては、大多数を男性が占める。

体育会学生が高校時代に出場した最高レベルの大会に関しては、約10%が国際大会に、半数が国内全国レベルの大会に出場した経験を持っている。彼らが本学に入学してきた際の入学試験のタイプでは、スポーツAOと公募制スポーツ入試というスポーツに関する能力や業績を重視する試験によって入学した学生が65%を占めている。さらに、彼らが入学をする際に希望する学部と学科に入ることができたかについては、「学部・学科ともに希望外」と回答した体育会学生は15%程に留まり、半数以上の体育会学生が「学部・学科とも希望どおり」と回答している。また約17%の体育会学生が「学部・学科ともに選べなかった」と回答しており、「学部・学科ともに希望外」の学生約15%と合わせて3割以上の体育会学生は自分が志望する学部・学科に所属していないことになる。

#### 2. 体育会学生にとっての競技の位置づけ

体育会学生にとっての競技の位置づけに関する3項目の度数分布を図1に示した。「プロ選手や実業団選手を目指したい」と考えている学生の割合は26.7%に留まっており、ある意味で現実的な認識をしているともいえる。ただし、この値には今回調査対象となった体育会の種目特性が影響しているとも考えられる。次に、半数以上の体育会学生が「学業よりも競技を優

表 1. 分析対象の属性と特性 (n=215)

<体育会種別>			<高校時の競技レベル>		
体育会A	53	24.6	国際大会	24	11.3
体育会B	47	21.9	全国大会	108	50.2
体育会C	70	32.5	地区大会	33	15.3
体育会D	21	9.8	都道府県大会	25	11.6
体育会E	24	11.2	その他	25	11.6
<所属学部>			<入学試験のタイプ>		
法	25	11.6	スポーツAO	75	34.8
商	33	15.3	公募制スポーツ入試	67	31.2
政経	88	40.9	一般入試	24	11.2
文	23	10.7	センター入試	7	3.3
経営	24	11.2	指定校入試	13	6.0
農	6	2.8	付属校入試	25	11.6
理工	10	4.7	その他	3	1.4
情コミ	5	2.3	欠損値	1	0.5
不明	1	0.5	<入学時の希望学部と現所属学部>		
<学年>			学部・学科ともに希望どおり	112	52.1
1年生	70	32.6	学部は希望、学科は希望外	10	4.7
2年生	57	26.5	学部・学科ともに希望外	32	14.9
3年生	51	23.7	学部・学科の希望なし	20	9.3
4年生	37	17.2	学部・学科を選べなかった	36	16.7
<性別>			欠損値	5	2.3
男性	210	97.7	<現在の部内の地位>		
女性	5	2.3	一軍・先発・トップチームのレギュラー	63	29.3
			一軍・先発・トップチームの控え	42	19.5
			二軍・サブチームのレギュラー	39	18.1
			二軍・サブチームの控え	54	25.1
			専属の主務やマネージャー	11	5.1
			欠損値	6	2.9

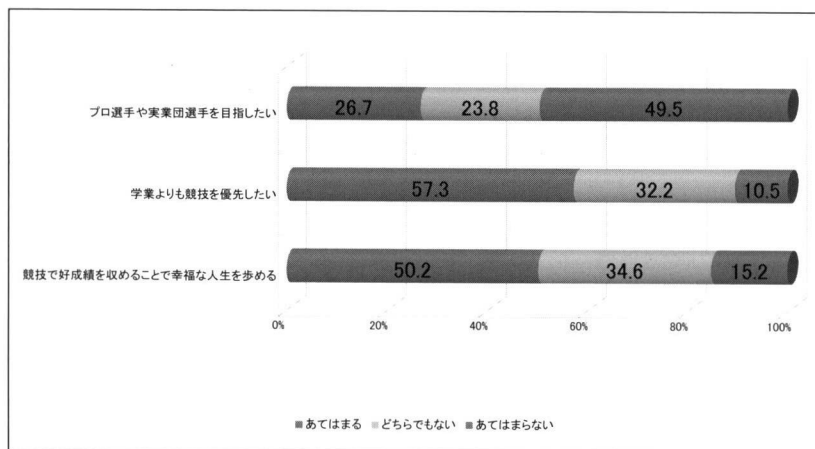


図 1. 体育会学生にとっての競技の位置づけ

先したい」と考えている。57.3%という値に高いという印象を受けるが、この値は彼らの本音を表していると考えられる。「競技」を「バイト」に置き換えれば、一般学生においても同様な回答傾向が認められるかもしれない。「競技で好成績をおさめることで幸福な人生を歩める」にもほぼ半数の学生があてはまると回答しており、体育会学生にとって競技の成功が人生の成功にもつながると考えられていることを確認できる。

### 3. 体育会学生としてのステイタス

体育会に所属していることのステイタスに関する項目を図2に示した。特記すべきは、体育会に所属していることに誇りを感じている学生が実に78.1%もいるということである。こうした価値観はそうたやすく得られるものではないと思われ、その背景には、各体育会の長い伝統とそこにおける実績があるのだろう。この「体育会学生であることを誇りに思う」という項目と、表1に示した学部、学年、入試タイプ、現在の部内地位の4変数との間でクロス集計を行ったが、いずれの関連においても有意な関連は見られなかった。つまり、学年や学部、入試タイプ、現在の部内における地位に関係なく、体育会学生としての誇りは共有されているといえる。

他方、46.6%の学生が就職活動時に体育会学生としてのコネクションを使えると回答しており、体育会学生であることの実利的な期待もうかがわれる。

### 4. 体育会学生の勉学に対する意識

図3には、体育会学生の勉学に対する意識や考えを示した。「勉強しなくても卒業することができる」「出席をとらないなら授業に出席しなくてもよい」という設問には半数前後の学生が当てはまらないと回答しているが、同時に2割前後の学生はそうした考えを支持している。勉強の仕方がわからないとの設問には42.1%の学生があてはまると回答しており、大学における勉強をする際につまづきが生じていることを示唆している。

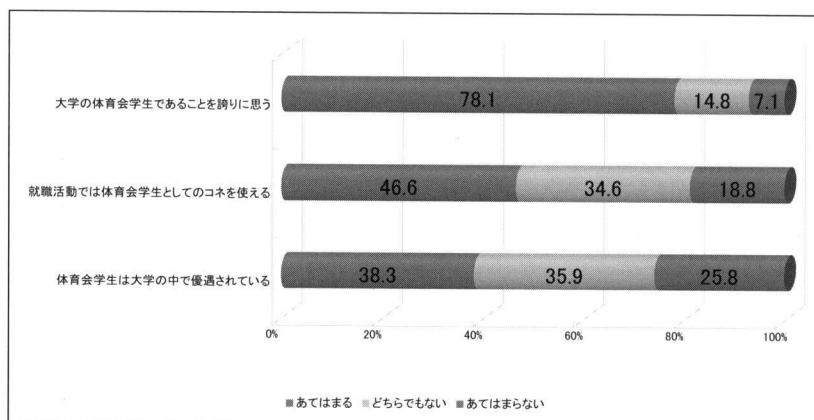


図2. 体育会学生のステイタス

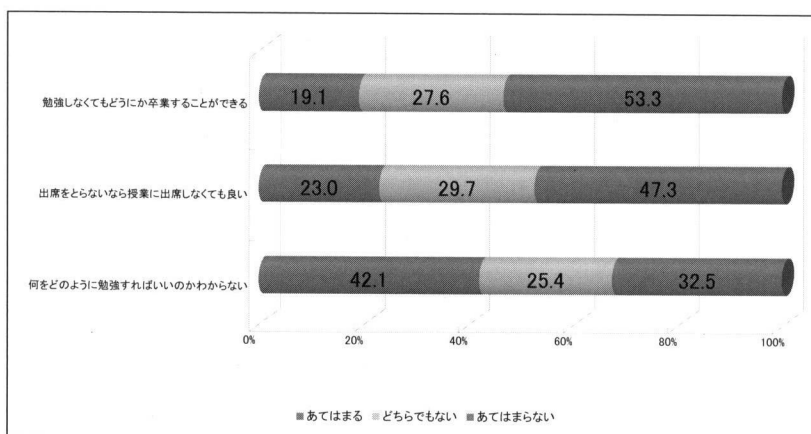


図3. 体育会学生の勉学に対する意識

図3に示した3つの設問と、表1の「入学時の試験のタイプ」「入学時の希望学部と現所属学部」との間でクロス集計を行ったところ、「出席をとらないなら授業に出席しなくてもよい」と「入学時の希望学部と現所属学部」、「どのように勉強すればいいのかわからない」と「入学時の試験のタイプ」

との間で有意な分布の偏りがみられた。具体的には、入学時に学部や学科の希望が叶わなかった体育会学生が「授業に出なくてよい」と答え、またスポーツ AO 制度で入学した体育会学生が「勉強の仕方がわからない」と答える傾向がみられた。

## 5. 引退後への意識

体育会学生たちが競技を引退した時のことについてどのような意識を持っているかを図4に示した。半数以上の学生が引退後のことを考えており、4割弱の学生が引退後に不安を感じていることがわかる。しかし、今すべき事が分からないと答える学生も3割近くいる。

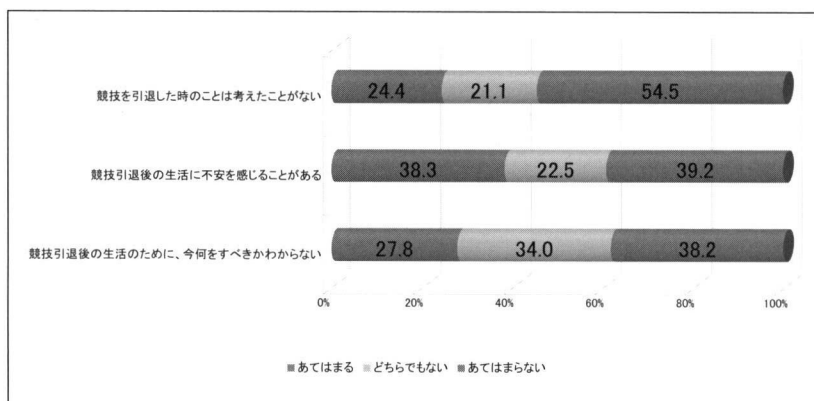


図4. 引退後への意識

## 6. 卒業後の労働意欲

図5には、体育会学生の卒業後における労働意欲に関する項目を示した。働きたくないという労働意欲の低い学生は1割弱であり、7～8割の学生がやりたい仕事につき、将来活躍したいという強い意欲を示している。図4において確認したように、引退後に不安を感じていたり、なにをしてよいか分からない学生がある一定割合いるものの、将来の労働意欲は十分に

持ち合わせていることがわかる。図5に示した「将来は自分のやりたい仕事につきたい」「卒業後は社会人として活躍したい」の2項目と、図3の「何をどのように勉強すればいいのかわからない」、図4の「競技引退後の生活に不安を感じることがある」「競技引退後の生活のために、今何をすべきかわからない」計3項目との間でクロス集計を行ったところ、将来は自分のやりたい仕事につきたい、社会人として活躍したいと答えながらも、何を勉強すべきか、将来に向けて何をすべきかわからない、将来に不安を感じると答えた学生の割合は分析対象全体の4割前後を占めた。この4割に該当する体育会学生たちの不安を取り除き、具体的にに取り組むべき事柄を示してあげられるようなサポートが必要だと思われる。

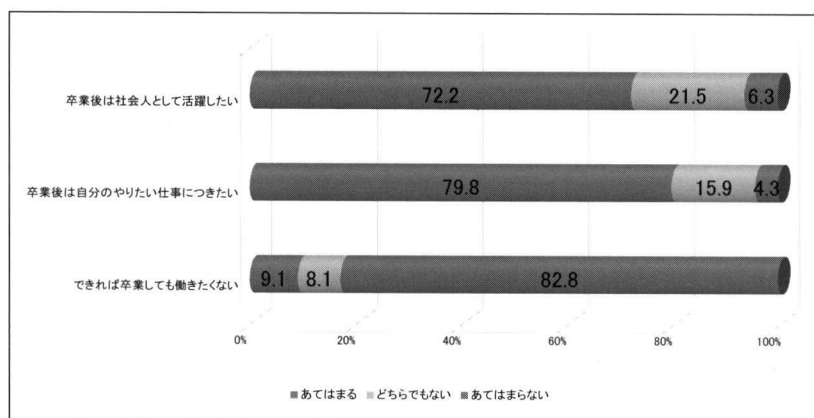


図5. 卒業後の労働意欲

## 7. 競技生活と大学生生活の充実度

体育会の活動全体に関わる競技生活について、そして競技活動以外の大学生としての生活全般について、それぞれどの程度充実しているかを「とても充実している」と「まったく充実していない」を両極とする5段階の尺度で回答してもらった(図6)。



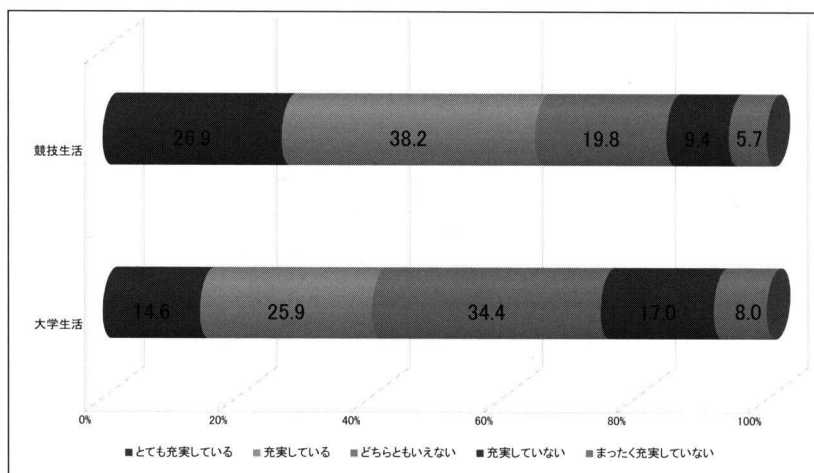


図6. 体育会学生の生活充実度

競技生活について「とても充実している」「充実している」と回答した体育会学生の割合はそれぞれ 26.9%、38.2%であり、両者で6割を越える。他方、「充実していない」「まったく充実していない」との回答は15%ほどである。もちろん全ての体育会学生が「充実している」と答える状態が理想ではあるが、本学の体育会所属学生の競技に関する充実度は良好だと判断してよいと思われる。こうした良好な傾向は、大学生生活全般の充実度においてはやや弱まっている。「とても充実している」「充実している」との回答は4割にとどまり、「どちらともいえない」が選択肢の中で最も高い割合（34.4%）を占める。

次に、競技生活と大学生生活の充実度の関連について検討するために、5段階で測定した両変数の選択肢を「充実している」「どちらともいえない」「充実していない」の3段階に変換し、両変数のクロス集計を行った（図7）。 $\chi^2$ 検定の結果は $\chi^2=68.43$ 、 $d.f.=4$ 、 $p<0.001$ で有意である。両変数の関連は図7からも明らかなように直線関係にあり、大学生生活が充実しているほど競技生活も充実している、という強い関連が見られる。ただし、

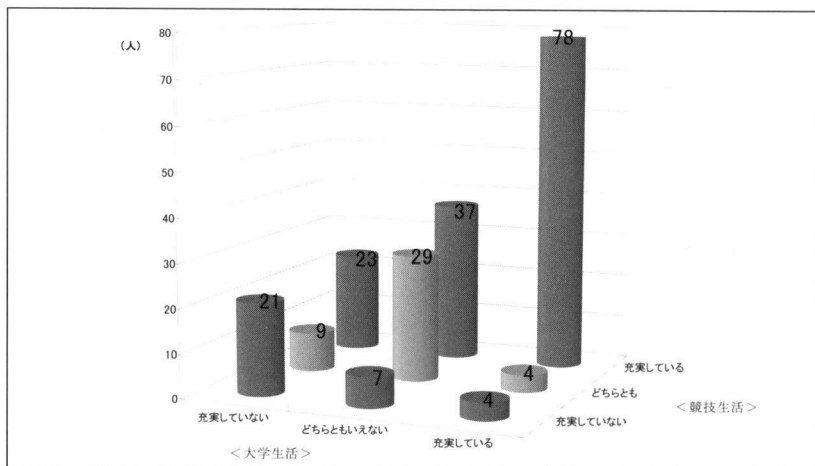


図7. 競技生活充実度と大学生活充実度のクロス集計結果 (n=212)

$\chi^2$ 検定の結果が意味することはあくまでも2変数の双方向の関係である。そしておそらく、競技生活と大学生活の充実度という2変数の現実的な関係も双方向のものであろう。つまり、大学生活が充実しているほど競技生活も充実しており、競技生活が充実すれば大学生活もさらに充実する、そういったどちらが先か判断できないような関係にあると思われる。しかし、体育会学生の半数以上がスポーツ関連の入試制度を経て入学してきたということを考えると、彼らにとっては競技生活が充実することがより重要であろう。そこでここでは、彼らの競技生活の充実度に関連を持つ要因は何かを、今回調査した変数の中から探っていく。

競技生活の充実度と関わりを持ちそうな6変数（学部、学年、高校時代の最高競技レベル、入試タイプ、学部・学科の希望と現状、現在の部内地位）との間でクロス集計ならびに $\chi^2$ 検定を行った。 $\chi^2$ 検定の結果、競技生活充実度と有意な関連が認められたのは、学年（ $\chi^2=12.717$ , d.f.=6,  $p<0.05$ ）と部内の地位（ $\chi^2=29.046$ , d.f.=8,  $p<0.001$ ）の2変数であった。具体的には学年が高いほど、そして1軍やトップチームに属している

ほど、競技生活は充実するという傾向が見られた。こうした結果に意外性はなく、経験的にも十分理解できるものであるだろう。他方、高校時代の競技レベルが高くて、あるいはスポーツに特化した入試によって入学していても、現在の競技生活が充実しているとは限らないと言う結果は興味深いものである。

## 8. セカンドキャリアに関する認識と行動

近年、スポーツ界においてはキャリアという語句がよく使われるようになった。Jリーグは2002年にキャリアサポートセンターを立ち上げ、Jリーグ登録選手の引退後に向けての活動支援を始めている。また(財)日本オリンピック委員会でも2003年より強化選手を対象としてセカンドキャリアプロジェクトを開始している。このようにキャリアサポート、キャリアトランジション、セカンドキャリアなどの言葉として使われることが多い。このキャリアは、本来は職業や仕事の経歴という意味を持っている。スポーツ場面では、セカンドキャリアはスポーツからの引退後における身の振り方（職業や仕事を含む）とそこでの心理的な問題を意味しており、スポーツ選手から一般社会人へとキャリアが変化していく過程と心理的狀態をキャリアトランジション、トランジションを円滑に行うための様々な組織によるサポートがキャリアサポート、ということになる。プロフェッショナルのスポーツ選手が引退するのであれば、プロスポーツ選手という職業から他の職業へと業種が変わるので、引退後の職業は文字通りセカンドキャリアと捉えることができてわかりやすい。しかし競技に没頭している選手にとっては、プロからの引退であってもアマチュアからの引退であっても、そこで経験する社会的立場の変化と心理的葛藤は同種のものであり、このことは大学の体育会部員として活動している体育会学生にもあてはまることである<sup>1)</sup>。

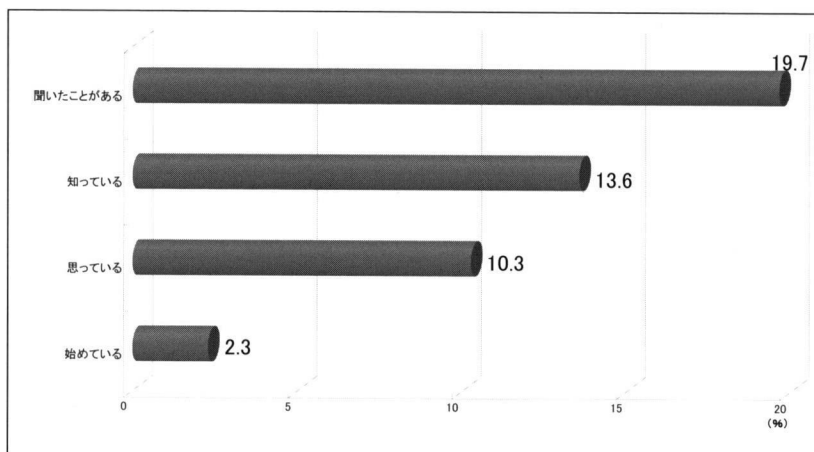


図8.「セカンドキャリア」についての認識と行動

このようにスポーツ界では盛んに使われるようになったセカンドキャリアという語句について、本学の体育会学生はどのように認識し行動しているのだろうか。図8には、セカンドキャリアについての認識と行動の現状を示した。セカンドキャリアという語句を「聞いたことがある」体育会学生は19.7%であり、語句の内容を「知っている」学生は13.6%、さらにセカンドキャリアに向けて何か行動をしなければと「思っている」学生は10.3%、実際に何かの行動を始めている学生は2.3%であった。聞いたことがある学生の割合19.7%が高いか低いかの判断は難しい。しかし、前述のように半数以上の学生が競技引退後のことを考えていながら、そうした問題のキーワードであるセカンドキャリアという語句を聞いたことがある学生が2割弱という結果からは、競技引退後のことに思いを巡らせるにとどまり、具体的に何か必要な情報を入手する段階に至っていないという状況を想定できる。

具体的な行動段階に至っていないというこうした傾向は、セカンドキャリアという語句を聞いたことがある学生においても確認できる。図8にお

いて、セカンドキャリアのために何かをしなくてはと思っている学生 10.3%と、実際に何かの行動を始めている学生 2.3%のギャップが大きいことがわかる。つまり、やらなければと思ってはいるものの、具体的な行動に踏み出せない学生が多いのであろう。そしてこのことは、こうした学生に対して具体的な方策を示し、一歩踏み出すための支援が必要なことを意味していると思われる。

ところで、図8に示した「聞いたことがある」「知っている」「何かしなければと思っている」「何か始めている」の4段階は、消費行動プロセスの一つである AIDMA にヒントを得て設定したものである。AIDMA とは次の各段階を表している：Attention（注意）、Interest（関心）、Desire（欲求）、Memory（記憶）、Action（行動）。つまり、人間は通常、ある消費対象の存在に注意を払うようになり、関心を持ち始める。さらに使ってみたいという欲求が芽生え、それが記憶された後に実際の消費行動に至る、というプロセスを説明している。このうち Attention は認知段階、Interest、Desire、Memory は感情段階、Action は行動段階と3段階に概念化される。

図8にみられる4段階のうち、「聞いたことがある」「知っている」は認知段階、「何かしなければと思っている」は感情段階、「何か始めている」は行動段階に該当する。このように考えると、行動段階にいる人の割合を増やすためには、認知段階にいる人の割合から増やしていく必要がある。つまり、セカンドキャリアのために何かを始めている体育会学生を現状の5倍の10%に増やしたいのであれば、セカンドキャリアについて聞いたことがある学生をほぼ100%にする必要がある、とひとまず考えるのである。体育会学生がセカンドキャリアについて聞いたことがある段階、さらには知っている段階に至るために有効となるのがキャリアサポート活動であろう。体育会学生が一般学生とは違った大学生活を送り、就職活動を経て就職に至るのであれば、彼らに対するキャリアサポートもまた、一般学生とは異なったものにならざるを得ない。就職先の斡旋にとどまらず、キャリ

アに関する準備活動も含めたキャリアサポートが行われるべきであり、そうした活動の中でセカンドキャリアという語句の認知率は高まっていくだろう。

キャリアサポートとして取り組むべきもう一点は、上述したような、セカンドキャリアのために何かをしなくてはと思っている学生 10.3%と、実際に何かの行動を始めている学生 2.3%のギャップを埋めることである。やらなければならないものはあるものの、実際にはなかなか行動に踏み出せないという現状があるのであれば、その一歩を踏み出すための情報提供や支援が必要であろう。ここにキャリアサポートを行う意義がある。例えばセカンドキャリアのために何かを始めなければならないと思っている学生の割合を現状維持したままで、具体的に何かをし始めている体育会学生の割合を約5%まで引き上げることができたならば、その割合をさらに 10%にするために必要な「聞いたことがある」人の割合は 40~50%ですむことになる。

#### IV まとめ

本稿の目的は、本学体育会学生たちの大学生活と競技生活の充実度、そして卒業後のキャリアに関する意識や行動の現状を把握することにある。本学体育会のうち5つの部に所属する学生を対象として質問紙調査を行った。調査対象は計 287 名であり、そのうち 215 名から回答を得た（回収率 74.9%）。主な分析結果は以下の通りである：

- (a) 体育会学生にとっての競技の位置づけに関しては、半数以上の体育会学生が「学業よりも競技を優先したい」と考えていた。
- (b) 体育会学生の 78%が、体育会に所属していることに誇りを感じており、こうした傾向は学年や学部、入試タイプ、部内における地位に関係なく共有されていた。
- (c) 勉学に対する意識については、42%の学生が「勉強の仕方がわから

ない」と回答しており、こうした傾向は特にスポーツ A0 入試で入学した体育会学生に顕著であった。

- (d)引退後への意識については、半数以上の学生が引退後のことを考えており、4割弱の学生が引退後に不安を感じていた。しかし、今すべき事が分からないと答える学生も3割近くいた。
- (e)卒業後の労働意欲については、労働意欲の低い学生は1割弱であり、7～8割の学生が将来やりたい仕事につき、社会で活躍したいという強い意欲を示した。しかし、高い労働意欲を示しながらも、今何を勉強すべきか、将来に向けて何をすべきかわからない、将来に不安を感じると答えた学生が4割前後おり、こうした体育会学生たちに対するサポートが必要だと思われる。
- (f)競技生活について「充実している」と回答した学生の割合は6割を越えた。こうした傾向は、大学生活全般の充実度においてはやや弱まり、大学生活が「充実している」との回答は4割にとどまった。
- (g)大学生活が充実しているほど、学年が高いほど、そして1軍やトップチームに属しているほど、競技生活が充実するという有意な傾向が見られた。
- (h)セカンドキャリアという語句を「聞いたことがある」体育会学生は19.7%であり、語句の内容を「知っている」学生は13.6%、さらにセカンドキャリアに向けて何か行動をしなければと「思っている」学生は10.3%、実際に何かの行動を始めている学生は2.3%であった。競技引退後のことに思いを巡らせるにとどまり、具体的に何か必要な情報を入手する段階に至っていないという状況を想定でき、行動段階に至らせるためのサポートが必要であろう。

引用文献

- 1) 高峰修「近年の日本スポーツ界におけるキャリアサポートの動向と大学スポーツにおけるその必要性」(明治大学教養論集, 403, 2006.1.) 99-110.

(たかみね・おさむ 政治経済学部准教授)